

父が子に語る本の話

東方孝之
〔開発経済学・インドネシア経済〕

今日もたくさん本を借りてきたようです。いま夢中になって読んで『何でも魔女商会』をちらっとみましたが、その内容の本を読むことができるなら、私がウン十年前に買ってもらった『ドリトル先生』や『大草原の小さな家』などをそろそろ子供用本棚にこっそり並べて置こうかな、と思った次第です。ところで、今から紹介する本は、いささか気が早い話ですが（とはいえ、せっかくこのような機会をいただきましたので）、高校生くらいになってからぜひ一度読んでもらいたいと思っている本です。読んだ後には世のなかの見方が変わるくらいの衝撃的な本です、という大げさでしょうか。

最初に取り上げるのはジャレド・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄（上・下）』（草思社、二〇〇〇

年）です。著者がニューギニアでフィールドワークをしている時に、現地の人から、欧米人と彼らとの生活水準にどうして大きな差が生じたのかを尋ねられたそうです。この疑問に答えるべく、考古学や生物学、文化人類学などさまざまな分野の研究成果を縦横無尽に使いこなし、地理的な要因が現在の大きな経済格差をもたらしたのだ、という結論を著者は導き出しました。ユーラシア大陸は東西に長いので、野生動物を家畜化したり、栽培に適した植物を発見したりできた場合には、緯度が一定の範囲内におさまっていることから、そうした品種が広がりやすかったのに対して、南北アメリカは縦に長く連なっているがためにそれが難しかった。そのために両大国間には技術に差が生じたのだ、と彼は考えました。また、ユーラシア大

陸では、その家畜の種類の豊富さと人口密度の高さにより致死性の高い病原菌の進化がもたらされ、これが後にヨーロッパ人が新大陸を訪れた際に、銃と一緒にアメリカ先住民の人口激減をもたらしたのだ、としています。読んでいてその壮大なスケールに圧倒される本です。

これに対して、このような地理説では産業革命後に顕著にみられるようになった国家間の所得格差を説明できない、として、持続的経済成長には制度の果たす役割が重要であることを指摘しているのが、ダロン・アセモグル／ジェイムズ・Ａ・ロビンソン『国家はなぜ衰退するのか（上・下）』（早川書房、二〇一三年）です。彼らは、地理的環境や民族構成などはほぼ同じなのに、歴史的偶然からある条件だけが違う、といったケース

に注目して、その違いが何をもたらしたかを丹念にみていきました。身近なところでは、日本からの独立をきっかけとして誕生した朝鮮半島の二つの国もその一事例として取り上げられています。このように歴史上観察される実験的な事例の分析を通じて、彼らのいうところの収奪的な制度のもとでは、新しい技術を発明・導入しようとするインセンティブが削がれることを示していきます。そして、所有権や発明が促進されるような制度が重要であること、さらに、こうした経済制度は政治制度の発展と切り離せないものであることを丁寧に説明しています。残念ながら『銃・病原菌・鉄』ほどにはこの本はあまり知られていないような気がするのですが、中身の重要さでいえば『国家はなぜ衰退するのか』のほうがより広く読まれてほしい本です。

これらの本からは歴史を学ぶことの大切さが分かるといえます。もうしばらくすると学校で歴史を勉強し始めますが、むしろ小説を通じて歴史に親しむ機会も増えることでしょう。しかし、どうやら歴史小説については取り扱いに注意しなければいけないようです。

特に司馬遼太郎の小説については、その「明治維新は正しい変革だったのに、日露戦争で勝利してから道を誤った」という単純な歴史観（司馬史観）があまりにも人口に膾炙したため、少なからぬ歴史研究者がその副作用を危惧しています。ということ、私の本棚にある司馬遼太郎の本を読むころには、歴史小説をフィクションとして楽しむためにも、小島毅『父が子に語る日本史』・『父が子に語る近代史』（トランスビュー、二〇〇八年・二〇〇九年）の一読をおすすめします。高校生を相手に日本の古代から現代までを語る、というスタイルで話を進めていますので、とても読みやすい本です。著者は、かつて知識人に広く読まれた頼山陽の『日本外史』という物語に描かれた歴史観が明治維新にいたるまで大きな影響を与えたこと、さらにその影響が戦前の日本に色濃く残っていたこと（そして今も残っている（一）こと）を紹介していますが、その同じ枠組みのもとで司馬史観の副作用を懸念していることが分かります。そして、日本がああ戦争に突入した背景には、戦前に広がっていた頼山陽的歴史観に加えて、必ずしも合

理的・科学的判断に従わない「常民」の存在を指摘しています。こうした過去と照らし合わせて、日本の現状に少なからぬ危機感を持っていることもその平易な語り口から伝わってきます。「海外の人と否応なく接点ができてしまう現代において、自国の歴史を学ぶことは避けられません」という説明にも全く同感です。毎日のように勉強不足を痛感していますので、私も日本史を学び続けることにします。

ところで、『国家はなぜ衰退するのか』で強調されていたのは制度の役割でしたが、政治制度については、各国がどの程度中央集権的であったか、そしてどのような形態の民主主義体制が採用されていたか、という点に著者らは注目しています。そろそろ小学校のクラスで何かを決めるときには多数決という方法を使っているませんか。民主主義のもとでは、どのように意見集約をはかるのか、を考えることがとても重要です。そして、直感的には最も望ましそうに思える多数決という意見集約方法には、みんなの本当の意見が汲み取られない可能性がある、という深刻な欠点があることが分かっています。

では、どのような方法が望ましいのでしょうか。坂井豊貴『多数決を疑う…社会的選択理論とは何か』（岩波新書、二〇一五年）は、ボルダやコンドルセ、そしてルソアの業績紹介を間に挟みつつ、簡単な事例とともに様々な意見集約方法の長所・短所を解説している良書です。そして、ボルダ・ルールという方法（例えば三つの選択肢がある場合には、各自が重要だと思う順番に三点・二点・一点を割り振ってその値を集計する方法）がより望ましいことを分かりやすく教えてくれます。さらに、この本では、現行の憲法改正ルールのもとでは国民の意見を反映していない判断が可決しうる、という極めて重要な指摘をしています（代わりに国民投票では六四％の賛成を求めることが必要だとしています）。近年、憲法改正をめぐる色々な意見が交わされるようになってきました。『父が子に語る近代史』には、「私たちは騙された被害者だ」とのセリフを後になって繰り返すことのないよう、物事をきちんと判断する力を養ってほしい、というメッセージが込められていました。その判断する力に含まれているのかもしれない

んが、みんなの意見が真つ当に反映される制度を作る大切さにも配慮できる力を養ってほしい、と私は付け足しておきます。

話が長くなりました。実際にこの文章を読むことがあったとしても、早くても一〇年後でしょうか。今回紹介した本は私の本棚に残しておきますので、いつかどれか一冊でもその感想を聞かせてもらえたらとても嬉しいです。その時には、例えば『国家はなぜ衰退するのか』で取り上げられていた国々がどうなっているのか、憲法改正の動きがどうなったか、といったことを一緒に振り返ってみたいと思います。とはいえ、まずは先ほど子ども用本棚に紛れ込ませた『ドリトル先生アフリカゆき』からでしょうか。その本の感想もとても楽しみです。それではまた。

（ひがしかた たかゆき／アジア経済研究所 東南アジア研究グループ）